

「神戸大漢文のみかた」の回となりました。二〇二五年度の神戸大学の国語第三問（漢文）を取り上げます。

次の文章を読んで、問一～五に答えなさい。なお本文の一部を改変したところがある。設問の都合で返り点や送り仮名、振り仮名を省略した部分がある。

崔弘度、鬚面、甚偉、性嚴酷。每戒其僚吏曰「人當誠恕、無得。」
 欺誑皆曰「諾。」後嘗食鼈。侍者八九人、弘度一一問之。曰「鼈美乎。」人怖之。皆云「鼈美。」弘度大罵曰「庸奴、何敢誑我。汝初未食鼈、安知其美。」俱杖八十。官屬百工看之者、莫不流汗、無敢欺隱。長安為之語曰「寧飲三升酢、不見崔弘度。」（以下省略）

（『隋書』より）

〔注〕○崔弘度——隋の官僚。博陵（現在の中国河北省）出身の貴族。

○鬚面——ひげが多い顔。ここでは男性の秀でた容貌を指す。

○僚吏——部下、下役。

○誠恕——自分の良心に誠実であることと他人への思いやりが深いこと。

○鼈——大型の亀、すっぽん。

○庸奴——ばかもの。人を非難する言葉。

○杖——木の棒のむち。刑罰としてむち打つこと。

○官屬百工——長官の下で働くさまざまな役職の官吏。

○長安——地名。隋の首都の所在地（現在の中国陝西省西安市）。ここでは長安の人々のこと。

○升——容量の単位。隋の一升は約〇・六リットル。

問一 傍線部①「當」、②「嘗」、③「安」、④「莫不流汗」を送り仮名をふくめてすべて平仮名で書き下しなさい。（現代

仮名遣いでよい）。

問二 傍線部（a）「之」は誰を指すか、本文中の言葉で答えなさい。（中略）

問四 傍線部（c）「寧飲三升酢、不見崔弘度」を平易な現代語に訳しなさい。（以下省略）

※本問題は二〇二五年度の神戸大学前期試験の第三問から一部を抜粋しております。

現役合格への 軌跡

問二・四のよう、一見単純そうな指示語把握問題や現代語訳問題の体を取り、傍線部に至るまでの文脈を的確に把握できているかを確認する問い合わせ出題される。神戸大学を目指す高校生の皆さんには、句形の暗記と同時並行で、読解の練習も積極的に取り組んでいくことを強く勧める。

卷之三十一

※なお本原稿における解答や解説は、神戸大学が公表したものではなく、研伸館が独自で作成したものになります。

【解説】	【解答】
問一	①まさに～べく「べくして」 ②かつて ③いづくんぞ ④あせをながめやいの(は)なく
問二	(崔)弘度
問三	いつそ三升の酔を飲む方が、崔弘度に会うよりました。
問四	

解說

①まさにうべく「べくして」 ②かつて ③いづくんぞ ④あせをながさざる(は)なく

問二
(崔)弘度

問四 いつそ三升の酔を飲む方が、崔弘度に会うよりまだ。

110

問⑪ 「当然A」は、「まさしくA」——と読み、「当然Aすくい」——「きのうA」——もう——と訳す、再読文字である。本文中

では、傍線部が「無得欺誑」に「」で続いているので、本活用連用形の「べく」とした方がよい。

問② 賞はどこでは「かで」と読み、「これまで」「以前に」と訴す副詞である。同様の問題が二〇〇

「安」は、一二では「ハガクハシギ」（現代反名畫）では「ハザクハシギ」と読み、疑問・反語の副詞で

こでは反語で訳す。

問 ④ 「莫不A」は「Aざる(もの・こと)(は)なし」と読み、「Aしないもの【こと】はない」と訳す、二重否定の句形

以上のような句形の書き下し問題は、神戸大学では例年出題されている。神戸大学を目指す高校生の皆さんには、句形の暗記はもちろん、複数の読み方を持つ句形に関しては、文脈・文構造に応じて適切な読みを選択できる力、また、本文に応じた活用にするといった古典文法の力も養う必要がある。

問二 傍線部「之」は、「」では「これ」と読む指示語である。傍線部に至るまでの文脈を確認しよう。本文の冒頭では、崔弘度の性格が「厳酷」（非常に厳しい）と書かれている。この内容を正しく読み取ること、またこの後の文脈に繋がるという意識が必要である。続く「後嘗食鼈」以降は、部下たちと崔弘度がすっぽんを食べる場面である。弘度は部下たち一人一人に「すっぽんは美味しいか」と尋ねて回り、彼らは、「之」を怖がって「美味しいです」と答えた、という内容である。冒頭の崔弘度の性格も加味すると、部下に恐れられている「之」は、崔弘度を指すと導ける。

問四

「寧ろ三升の酔を飲むとも、崔弘度に見えず」と読む。「寧A、不B」は、選択形の句形で、「いつそAの方が、Bよりましだ」「たとえAしても、Bしない」など、AとBを比べてAを選ぶ解釈になる。まずはこの句形の知識が問われている。しかし、傍線部に至るまでの文脈も把握しておかねば、長安の人々のこの発言の意図はつかめない。問二でも確認したとおり、本文の冒頭では、崔弘度の性格が「厳酷」であり、それに関するエピソードが続く。弘度は「自分の良心に誠実で他人への思いやりが深くなればならず、人をだますことはあつてはならない」という教えを日頃から部下たちに説いていたが、部下たちは弘度を怖れるあまり、顔色をうかがつて嘘をついた。弘度は、日頃の教えを守らなかつたとして、部下たちをむち打ち、罰したのである。その内容を踏まえると、弘度という人物がいかに「厳酷」な人物かがうかがえよう。傍線部は、「三升の酔を飲む」と、「崔弘度に会うこと」を比べ、三升の酔を飲む方がましなほど、厳しい性格の弘度には会いたくない、ということを表現している。それほど世間の人々も弘度を怖れていたのである。この設問には句形の知識も必要だが、傍線部に至るまでの内容も把握できていなければ、解答することは難しいであろう。